

# 新大陸原産植物の伝来

— ジャガイモの呼称にみる時代と環境 —

熊谷明子  
(東京農業大学)

ジャガイモの原産地はチチカカ湖周辺で、栽培は A. D. 500年頃と考えられる。

ジャガイモは新大陸からヨーロッパへ運ばれ、やがてアジアに渡り、そして日本に伝来したのは天正4年(1576)、慶長3年(1598)、慶長8年(1603)などの説がある。

ジャワ島のジャカルタから船載されて平戸に着いた船に、これまでに目にしたことのない珍しい芋のようなものがあるというところから、ジャカルタから来たこの見知らぬ芋を、ジャがたらいもと呼んだ。

ジャカルタの命名は、カラバ土侯国王がコショウ通商のためポルトガル人と開港調印した地を、やがてイスラム教土侯が1525年に占拠し、勝利を意味する Jayakarta と命名したのが地名の始まりである。

東洋に進出したオランダ人はここに Jacatra 町を建設した。以来、この地からオランダ船に積載されて長崎へ渡来した見知らぬものには、ジャガタラ縞、ジャガタラ水仙などというように、類似した品物には出港地名を冠して名付けたのである。1619年にオランダはこの地を Jacatra から Batavia と改称している。

ジャがたらいもは後にその呼称が簡略化され、ジャガイモと呼ばれるようになった記述が貝原好古の「和爾雅」(1688)にある。

馬鈴薯という呼称は、本草学者の小野蘭山が文化4年(1807)に書いた書物の中で、ジャガイモが馬の首につける鈴に似ていることから馬鈴薯として記述したのが始まりとされ、漢字書きが可能なところから以来、書物の上ではジャガイモが馬鈴薯として扱われるようになった。

当初、ジャガイモの栽培は捗らず、人々からは省り見られず、食用としてよりも、むしろその花が鑑賞用として喜ばれた。

ジャガイモが食用に供されるようになりその真価が認められるのは、人々が飢

籬を経験し、じゃがいもの繁殖力が容易で、人力を労すること少なく、荒地に栽培が可能なことを知ってからである。

じゃがいもにはこの他に、消太夫いも、善太夫いも、お助けいもなどのように、飢饉のときの救荒作物としてじゃがいもを導入し、栽培した人への恩義を感じて付けた呼名がある。

二度いも、三度いも、五升いも、八升いもなどというのは、年間の栽培回数、個体当りの生産性、またその収量性を示す名で、これらはじゃがいもの特性に由来した独特の呼名である。

松露いも、なしいも、まんじゅういも、などの呼称もあるが、これらはその形状から名付けられたものである。

このように、呼称にはその品物を表示し、表現する力があり、その名を流通させた社会の環境であり、人々の生活感覚の反映を見せている。

呼称とはレッテルをつけることである。そのレッテルには言葉のもつ意味がある。呼称ひとつの変遷の中にも、言葉と文化の関係、また文化としての言葉が見えない文化と大きく関連していることを知らせている。

元来、自覚されにくい、この見えない文化との関連を呼称の面から研究することが、言葉と文化、文化と社会との組成を知るうえで、忘れられてはならない。